

常照

第793号

本願寺小樽別院

二月の常例布教（ご法話）のご案内

○前期 二月七日（金）～十一日（火）

北海道教区 留萌組 西曉寺

講師 藤 法 順 師

○後期 二月十三日（木）～十六日（日）

北海道教区 後志組 照覚寺

講師 佐々木 法 雨 師

○場 所 小樽別院内

○時 間 午後二時（法要終了後）～午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。

どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院くださいますよう、
お待ちしております。

元旦のおつとめ

〈修正会〉(しゅうしやうえ)

「あけましておめでどう」お正月になれば、どこの家庭でもかわされるあいさつです。しかし、いったい何がおめでたいのでしょうか。ごちそうを食べたり、お年玉をもらったりできるからでしょうか。一つ歳をとって大きくなったからでしょうか。そのめでたさの中身をちよつと考えてみるのが元旦のおつとめ〈修正会〉です。

去年はあまり良いことがなかったけど、今年はきつと良いことがあるだろうと、新しい年に望みを

もつのは当然のことと言えましょう。しかし、何でも望みどおりになった年など、今までにあったでしょう。結局、去年のいやなことを忘れ、お正月に新しい夢を見る、そんなことを毎年くり返しているのではないのでしょうか。

いのちが無限に続くならば、それでもいいかもしれません。しかし誰もが必ず死を迎えます。しかも、自分がいつ死ぬかは誰にもわかりません。いのちには限りがあるということを知り、夢から覚めることが大事です。そうでないといくつになっても「今年こそは」といいながら、もう二度と戻ってこない「今」という大切な時を空しく過ごしてしまうことになりま

す。

親鸞さまは、人間が生きていくうえでなくてはならないことを「真宗」という言葉で示してくださいました。真宗に出遇えば、誰もがどんな状況の中でも、いきいきと生きることができると教えておられるのです。

自分の好きなことだけを求める生き方は、逆にいえば、いやなことが起こるのではないかといつもビクビクしている生き方です。ところが現実には、自分の望みに反していやな問題がたくさん起こってきます。そのような中で、いやな問題であっても受け止めていけるのは、自分の好き嫌いよりも、もっと大切なことがあると気づいた人

です。

私たちにとって何が本当に大切なことであるか、それを改めて考えるのが元旦のおつとめ（修正会）です。

『門松や

冥土の旅の一里塚

めでたくもあり

めでたくもなし』

一休禅師

年が明けた、正月だ、めでたい、めでたい。正月気分まつ只中の人々のお祝い気分には水を差すような一休禅師の逸話です。

「めでたいのう、めでたいのう。あの世にまた一歩近づいたのだから」

ら、めでたいのう。正月に飾られる門松は、まるで冥土へと向かう道に築かれた一里塚みたいなものよ」

このような意味の一句を詠みながら、しかも、手には竹竿を持ち、その竿の先に人間の髑髏（しやれこうべ）を刺して、年が明けたばかりの京の町を練り歩いたという。

一休さんは新年を祝うということは、死の近づきを祝っているという意味でもあるんだぞ。死はすぐそばにあるんだぞ。自分の死というものをちゃんと認識した上で、正月を祝うんだぞ。

そんなメッセージを込めた一句かもしれない。

これまでがこれからを
決めるのではない



これからがこれまでを
決めるのだ

藤代聡魔